

より低かつた。

(5) 溶滓中酸化鉄の溶鉄中炭素、または、固体黒鉛による還元反応速度定数は、溶滓の CaO , SiO_2 が 1.5 で最大となつた。

文 献

- 1) 佐藤 彰, 中川龍一, 吉松史朗, 福沢 章, 尾崎太: 鉄と鋼, 65 (1979) 12, p. 1683
- 2) たとえば, B. B. KONDAKOV and D. I. RIYDJONKOV: Izv. VUZ Chern. Metall., (1963) 1, p. 17, および須賀田正泰, 杉山 喬, 近藤真一: 鉄と鋼 58 (1972) 10, p. 1363 など
- 3) W. O. PHILBROOK and L. D. KURKBRIDE: Trans. AIME, 206 (1965) 3, p. 351
- 4) S. K. TARBY and W. O. PHILBROOK: Trans. AIME, 239 (1967) 7, p. 1005
- 5) I. D. SOMMERVILLE, P. GRIEVESON, and J. TAYLOR: Ironmaking Steelmaking, 7 (1980) 1, p. 25
- 6) 川合保治, 森 克巳: 鉄と鋼, 58 (1972) 7, p. 932
- 7) 第3版鉄鋼便覧, 基礎 I (日本鉄鋼協会編) (1981), p. 77 [丸善]
- 8) Metals Handbook, (1973), p. 274 [ASM Metals Park]
- 9) 佐藤 彰, 中川龍一, 吉松史朗, 福沢 章, 尾崎太: 鉄と鋼, 67 (1981) 2, p. 303
- 10) 溶鉄・溶滓の物性値便覧 (溶鋼・溶滓部会編) (1972), p. 22 [日本鉄鋼協会]
- 11) C. WAGNER: Physical Chemistry of Steelmaking, ed. by J. F. ELLIOTT (1958), p. 237 [John Wiley and Sons, New York]
- 12) G. W. LLOYD, D. R. YONG, and L. A. BAKER: Ironmaking Steelmaking, 2 (1975) 1, p. 49
- 13) D. R. SAIN and G. R. BELTON: Metall. Trans., 7B (1976), p. 235
- 14) J. F. ELLIOTT: Trans. AIME, 227 (1955) 3, p. 485

コ ラ ム

東欧での雑感

論文の最後のページの白紙部分を有効利用するためにコラムが設けられてから1年以上経つが、材料不足でなかなか完全に埋まらないのが現状である。いつも他の編集委員の方々をお願いしている立場上自分で書かなければならぬはめになつた。

さて、昨年と今年と引き続いて二三の東欧諸国を訪問する機会を持つた。どこの国でも最近の日本の鉄鋼技術の目ざましい発展を畏敬の目で眺めているには違いないが、ふと気がついたのは国による原料事情の相違である。我が国が何も資源のないことを武器として世界中で最良の原料を入手しているのに対し、これらの国では政治的・経済的理由から今なおいろいろと問題の多い国内資源を利用さざるを得ない所が多い。

もちろん世界の趨勢は例えばフランスのように国内のミネット鉱のような貧鉱をあきらめて臨海製鉄所に重点を移そうとはしているが、これらの諸国では日本の技術者にはたぶん理解できない異質な技術的課題に取りくんでいる。これは日本の黒鉱処理等に見られるような非鉄製錬分野における芸術的とまでいえる選鉱製錬技術や国内資源を利用すべく苦勞された戦前・戦中の技術者の努力を思い起こさせるもので、大変感慨深いものがあつた。

このような意味で、日本の大学の研究も大量生産技術の開発のお手伝いをする一方で趣味に走るとのお叱りもあろうがこのような複雑な問題に挑戦するのも面白いのではないかと思う。

(東京大学工学部 佐野信雄)